

# 都電 三ノ輪橋から吉原・山谷、千住宿へ

2016 年 4 月

三ノ輪橋 ⇒ 三ノ輪商店街 ⇒ 浄閑寺 ⇒ 吉原大門  
⇒ 山谷 ⇒ 回向院 ⇒ スサノ神社 ⇒ 千住大橋  
⇒ 千住青物市場跡 ⇒ 千住商店街 ⇒ 千住宿



## 三ノ輪・大関横丁

明治道路と日光街道が交差するあたりは三ノ輪と呼ぶ地域で、地下鉄日比谷線の三ノ輪駅がある。

また少し離れたところに都電荒川線の終点である三ノ輪橋と三ノ輪の商店街がある。この界隈は昔、散歩の会で訪れたことがある。「わけありの人たちが住むアパート」はこの一角にあった。場末の雰囲気を感じ出しているところで、荒川区民である私としてはなんとなくホッとするとところでもある。

交差点から少し入ったところに、大関横丁のバス停がある。住居表示としてはすでに消え、バス停だけに名を残している。

大関は江戸時代に黒羽藩の大名屋敷があったことに由来する。黒羽は栃木県北部にある私の田舎で、2 万石の大名の姓が大関であった。領主としては大関増業が知られている。

## 浄閑寺 (じょうかんじ)

日光街道を渡って間もなく浄閑寺がる。江戸時代には通称、投込寺と呼ばれていた。安政の大地震の時に、新吉原の遊女の遺体が数多く捨てられ（葬られ）た。吉原の遊女の死体が投げ込まれてきたと言われており、「生まれては苦界 死しては浄閑寺」といわれた。新吉原総霊塔がある。



三ノ輪の梅沢写真館  
以前は旧王子電気鉄道の本社

## 遊女「若紫」

墓苑の入口あたりに「若紫」の墓（碑？）がある。若紫については、永井荷風の次のような文がある。

「姓は勝田、名はのぶ子。浪花の人。若紫は遊君の号なり。

明治 31 年始めて新吉原角海老楼に身を沈む。楼内一の遊妓にて其心も人も優にやさしく全盛双ひなかりしが、不幸にして今とし 8 月 22 日思わぬ狂客の刃に罹り、22 歳を一期として非業の死を遂げたるは、哀れにも亦悼まし。そが亡骸を此地に埋める。法名紫雲清蓮信女といふ。

茲に有志をしてせめては幽魂を慰めはやと石に刻み若紫塚と名づけ・・・」

(昭和 12 年)

## 首洗いの井戸

墓の一角に首洗いの井戸がある。霊気漂う空間である。

鳥取藩士の平井権八は、父の同僚の本庄助太夫を些細な恨みで殺して逃げる。

本庄兄弟は三ノ輪に住んで親の仇である権八の行方を追うが、しかし権八に

逆に居所を知られ、兄が吉原田圃で返り討ちに遭う。

さらに弟も、兄の首を浄閑寺の井戸で洗っていたところを襲われて命を落とし仇討ちに失敗、悲惨な末路をたどった。

## 白井権八

白井権八

江戸初期の鳥取藩の武士。父の同役を殺害して国元を出奔し、

江戸で吉原三浦屋の遊女小紫となじみを重ねる。

金に詰って辻斬り強盗を重ねて処刑され、小紫もあとを追って自害した。歌舞伎で知られる。

この会で以前歩いた目黒不動の前に墓があったのを記憶されている人も。

写真家・荒木経惟は浄閑寺前の下駄屋の息子だったそうだ。



## 山谷(さんや)

今や若い人たちは山谷の名を知らないらしい。

半年ほど前、久しぶりにこの一帯を歩いて、様子が大きく変わっているのに驚いた。

「あしたのジョー」の舞台になったかつての山谷は、釜ヶ崎や横浜の寿町と同様に日雇いの労働者が集まり、時に精神異常者などを遺棄する場所だった。昭和 30、40 年代の高度成長期、肉体労働者の需要が急増したことで、蚕棚や狭小な部屋の 300 軒ほどのドヤ（簡易宿泊所）があった。日雇い労働者の暮らしは劣悪で、暴力団が仕切り、暗いイメージがこびりついてた。

しかし現在は、肉体労働者の需要が減り、労働者の高齢化もあって、山谷は生活保護で暮らす人がその大半を占めるようになっている。「日雇い労働の街」から「貧困孤独な生活保護者の街」への大きな変化だ。



街を歩くと、労働する気力をなくして路地に座り込んでいる人が目につく。皆、生活保護者で、NPO 法人が宿とわずかな金を渡して彼らの生活を面倒みている、というよりは管理している。NPO もさまざまで、かつて暴力団、今 NPO として生活保護費をピンハネしているのも多い。2000 年代に入るところから簡易宿泊所は外国人バックパッカーの宿泊所としても利用されている。地図でみるとわかるように、南は吉原遊郭に、北はかつての小塚原の処刑場に隣接し、江戸時代には下層民が多く集まり、1923 年の関東大震災や戦災には被災者救援のテント村が作られ、戦後、貧者の逃げ場また職を探す者が集まる街に変化した。福島原発の仕事も山谷からの派遣が多く、使い捨ての労働者の供給地として扱われてきた歴史が今に続いている。

## カフェ・バッハ

山谷の一角に知る人ぞ知るコーヒーのメッカ「カフェ・バッハ」がある。1968 年に開店、1972 年に自家焙煎をはじめた。創業者の田口護氏は 1980 年、コーヒー自家焙煎セミナーをはじめ、多くの後継者を育ててきた。昨年、NHK のプロフェッショナルに出演、また『プロが教えるこだわりのコーヒー』を著している。店は、遠くから訪れてくる客でいっぱい。



## 泪橋

山谷の交差点に泪橋がある。橋はなく暗渠になっているが、昔は 思川に橋が架かっていた。小塚原の刑場はこのすぐ北にあり、刑場に行くのにこの橋を渡った。この世との最後の別れ、近親者との別れの間であった。漫画 あしたのジョーでは、実際には橋はないが、泪橋の下にボクシング・ジムがあるという設定になっている。「人生に敗れてドヤ街に流れ着きこの橋を渡る」、これを逆転させ「泪橋を逆に渡り、明日の栄光を目指す」というのが作品のテーマだ。

## 南千住回向院

JR 南千住駅はちょっと変わっている。駅を降りてすぐ、あまり人通りもない角に刑死者を数多く供養する小塚原回向院がある。1667 年に本所の回向院の住職が、行き倒れや小塚原刑場の刑死者供養のために開いた寺で、安政の大獄により刑死した橋本左内・吉田松陰・頼三樹三郎ら多くの志士、「毒婦」と云われた高橋お伝などが葬られている。谷中霊園にお伝の碑があったのを憶えているでしょうか。1771 年に、蘭学者杉田玄白・中川順庵・前野良沢らが解剖（腑分け）に立ち合ったことを記念する観臓記念碑がある。血のにおいが残るちょっと怖いお寺だ。

## コツ

回向院を出たすぐの道が通称コツ通り、この道の両側がコツ通り商店街である。小塚原処刑場があった場所の道路で、処刑された人骨が沢山出てきたことに由来する名ともいわれている。落語の「今戸の狐」や人情話の「藁人形」にもこのコツと呼ばれる場所が出てくる。

「日の暮れる時分に千住の宿に入る。昔あそこには女郎屋がありまして、あそこをコツといいました。お仕置き場のあとに廓ができました。吉原と違って千住に遊びに行く人は千住もまたいいと行くんですが、宿（しゅく）でありますけれどもかなり発展をしました。」（志ん生「藁人形」）

## 四宿（ししゅく）と千住宿

五街道の最初の宿場は、千住（奥州道中・日光道中）、品川（東海道）、板橋（中山道）、内藤新宿（甲州街道）で、この 4 つの宿を江戸四宿といった。この宿（しゅく）は江戸の内外を分ける目安になり、江戸処払いの罰は、これらの宿を境界にしていた。

旅の見送りもこの宿までで、『奥の細道』で知られる芭蕉の奥州への旅では、弟子たちがこの千住まで見送りに来た。だが、芭蕉が旅だったのが千住大橋の手前なのか先なのかで論争になっている。

隅田川が足立区と荒川区の境界をなしていることから旅立ちの起点で争っていて、記念碑は両岸にそれぞれ作られている。

### 行く春や鳥啼き魚の目は泪

「奥の細道」の芭蕉の句、千住で読んだ句だ。「魚の目は泪」が突拍子もなく思えたものだが、先日やっと納得した。じつは芭蕉の旅立ちに多くの弟子が見送りに来たが、その中に魚商人がいて芭蕉との別れを惜しみ涙をながした。魚の目はこの魚屋の泪だったということだ。芭蕉はやはり天才かも。

四宿のなかで最も規模が大きいのが千住宿で、日光街道に沿って2.5キロメートルも続き、人口も江戸末期には1万人近くあり、他を圧倒していた（内藤新宿は2000人余り）。宿には、遊女である飯盛女がいた。その数は幕府によって決められていたが、あまり守られなかったといわれる。



### 千住宿について

千住宿には昔の名残を留める建物などは必ずしも多くない。時代の変化がこれを不可能にした。だが、昔の宿をイメージしながら歩くのも、想像力の豊かな皆さんにとっては案外楽しいのではないかと思う。

以下、千住大橋から街道を北に向かって簡単に説明する。千住の開発は戦国期以前にさかのぼり、宿として成立した慶長2年(1597年)には既に千住大橋が架けられた。江戸時代になり、徳川家康の街道整備で千住は幕府の直轄となり、寛永2年(1625年)に日光街道の江戸から数えて最初の宿に指定された。千住宿は、当初は、現在の北千住駅に近い千住一丁目から五丁目までだった。万治元年(1658年)には、千住大橋に近い現在の千住仲町・千住河原町・橋戸町が千住宿に加わった。さらに、千住大橋の南、現在の荒川区小塚原町・中村町が千住宿に加わり、これらを合わせて千住宿と称した。

天保15年(1844年)の「日光道中宿村大概帳」には、当時の人口が9556人、家数は2370軒、本陣1、脇本陣1、旅籠55軒があったと記されている。京成電鉄のガードから150mほど北に行くと、白壁の蔵「千住宿歴史プチテラス」がある。この蔵は千住に数多く現存する蔵の1つで、平成5年(1993年)に移築したもの。プチテラスから7、8m先の旧道の左側に「旧日光街道」、「是より西へ大師道」の文字を刻む道標がある。ここは、日本三大師のひとつ西新井大師への道の起点。大師道は江戸から参詣に出向く際の幹道として使用された。墨堤通りを挟んで千住河原町の北隣りに千住仲町がある。当地は、江戸時代はじめ掃部宿と呼ばれたところで、後に商業の中心地として栄えた。現在も旧道界限には、一里塚跡、高札場跡などがある。





高札場は、幕府や藩から出される法令・規制を記すお触書や重犯罪人の罪状を記す板札を、人目を引く辻などに掲げたところである。

一丁目から五丁目一帯は、千住宿として最も早くから機能したことから宿の行政や宿泊地の中心として発展した。

一丁目の南詰近くに「千住宿 問屋場 貫目改所跡」の標柱がある。

問屋場 (といやば) は宿の事務担当機関として街道を往来する旅人のために駕籠や人馬の継立などを行ったところで、足立信金本店と旧区役所の敷地がその跡地にあたる。その向かいに飛脚宿と馬寄場が設置され、北側の貫目改所では、幕府が規定する荷重量についての検査が執り行われた。

## 金蔵寺

金蔵寺という名の寺は京都をはじめ各地にあるが、千住宿にある金蔵寺には、興味深い2つの供養塔がある。一つは、1837年の天保の大飢饉の餓死者の供養塔で、1838年に建てられたものである。碑文には、「…飢えで下民に食なし…この地に死せる者828人…370人を金蔵寺に葬り…」と彫られている。もう一つは、千住宿の遊女の供養塔で、この地で死んだ遊女の戒名が刻まれている。千住宿には、55軒の旅籠屋、そのうち遊女を抱えていた旅籠が36軒あり、品川宿同様に宿場以外に江戸近郊の遊里として発達した。遊女は死して無縁仏同様に葬られた。東京芸術センター近くにある不動院もまた投げ込み寺であった。

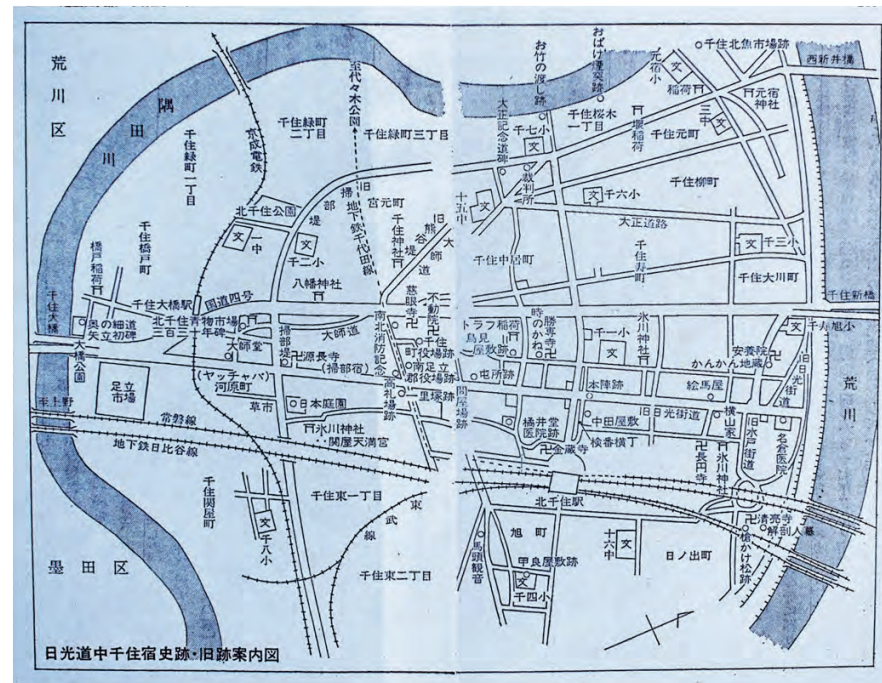
三丁目の「千住宿本陣跡」の標柱が建つところは、大名や幕府役人、日光を往復する門跡などが宿泊した施設跡。

四丁目に、宿場町風情を今に伝える二軒の旧家がある。

一軒は、江戸中期から代々、絵馬や行灯、凧を描いてきた際物問屋の絵馬屋・吉田家。もう一軒は江戸時代から続いた紙問屋「松屋」の横山家。横山家の家屋は江戸時代後期の建築で、玄関の柱に残る傷跡は官軍と戦った彰義隊が刀で斬りつけたものという。

千住宿は、日光街道 (奥州街道)、江戸と水戸を結ぶ水戸街道、江戸と喜連川を結ぶ下妻街道の分岐点になっており、四丁目の北詰から右折し東に延びる道がかつての水戸街道である。

五丁目の中ほどから左 (西) に折れる道が旧日光街道道の延長で、下妻街道は、旧道を直進したが荒川放水路の開削で寸断されている。



## 千住青物市場 (いちば)

江戸の青物市場は、神田、駒込、千住、の三力所が大きかった。神田市場は、秋葉原が再開発されるまで秋葉原駅の北西の広い敷地にあったが、江戸から明治の時代には神田川の南、万世橋から須田町の界隈にあった。駒込市場は、駒込の白山、現在の東洋大学から本郷方面に少し行ったところにあった。千住市場は、戦前まで、千住大橋を渡った日光街道沿いにあった。市場の形をなしたのは1735年頃といわれている。青物市場は、昔は「やっちゃば」といわれていた。中高生時代の友人に神田市場の問屋の息子がいたが、彼も「やっちゃば」といっていた。

日光街道に面する千住河原町の両側が「やっちゃば」の跡。  
新旧街道の分岐点あたりが南詰めで、河原町稲荷を中心にして、墨堤通の手前を北詰めにする広い一帯。  
千住市場は、他の2つの市場と違って、周辺はまだ農業地帯であったから、集荷した青物を大市場に近い江戸の他の市場に送る役割をもっていた。  
このため市が開かれる時間は早く、3時には始まったといわれている。  
これは昭和になってからも変わらず、仲買ともいうべき「投師(なげし)」という人たちが130人ほどいて、この市場で仕入れて都心の市場に転売していた。  
ただ、市場といっても、道の両側に多くの問屋が店を連ねていたという形をとり、それぞれの店先でセリが行われていた。繁栄期には30件以上の青物・土物問屋が並んでいた。



昭和初期の千住市場



ゴボウの競り

江戸時代には、千住市場は将軍家とのつながりがあり、千住の問屋から野菜などが江戸城に供給された。市場(いちば)として認められた代わりに、冥加金として青物や白魚が上納された。青物はレンコン、イモ類が中心。問屋が羽織袴で付き添い、荷物の上には「千住市場江戸納品御用札」の木札を立て、行列を横切ったものは罰せられた。

円生の語る落語「首提灯」のマクラに次のようなくだりがある。

「江戸府内でございますが、高輪の大木戸、四谷の大木戸あるいは千住の大橋などという、これは江戸との境界線でありまして、一步向こうに出ると下座触(げざふれ)というやつが来るとどうしても土下座をしなくちゃならないという訳で、

〈兄い、待ってくれ、まだ大分あるのかい〉  
〈西新井か、もう千住のやっちゃば(、、、、)だからもうひと踏ん張りだ、どうしたい、疲れたかい〉  
〈疲れた訳じゃねー、しかしなんだね、ここは賑やかじゃねーか〉  
〈江戸へ青物が出ていこうってんだ、千住のやっちゃばというのはなかなか繁盛だ〉  
〈来やがったぜ〉  
下(したー)に(に)、下(したー)に(に)、えー、下(したー)に(に)、下(したー)に(に)  
〈見てやれ、間抜けな面して〉  
〈ほら、立ってちゃいけねーよ〉  
〈ええー?〉  
〈お辞儀をするんだよ〉  
〈なんでー、こんなところでお辞儀をするとは思わなかった。だから虫が知らしたんだよ、今日は出るの嫌だっていったんだよ〉  
〈何が〉  
〈何がってそうじゃねーか、厄年だから西新井の大師さんに厄払いしろていうから、しょうがねーから来たんだよ。江戸にいりゃーどんな大名が通ろうと立ってたっていいんだ。何が通るかかわかんねーのに地べたの臭いを嗅がなきゃなんねー〉  
〈何も臭いを嗅がなくなっちゃっていいじゃねーか〉  
〈無理なこと言っちゃいけねー、こうやってれば自然に臭いを嗅ぐじゃねーか……〉  
〈もう行っちゃったよ〉  
〈もういいのか?、安直なお通りじゃねーか、馬も籠も通らねー、箱が一つ行っただけだ、箱中で殿様がとぐる巻いてるのか〉  
〈あんな箱に入れやしねー、聞いてみてやろう。旦那、ちょっと伺いますが、今通ったのはどこの殿様です?〉  
〈今お通りになったの? あーあ、殿様じゃーないよあれは。将軍様に献上にあがる長芋だよ〉  
〈馬鹿にしてやらー、安心しろや、いま芋にお辞儀をしたんだよ。驚いたなー、じゃあ明日からは八百屋の前だけ這って通ろうじゃねーか〉  
〈口の減らねーやつだ〉



## 現代の北千住

北千住は隅田川と荒川に挟まれた一角で、東京の場末である。だが最近はとみに元気な街になっている。これはなにより交通の便が良いからである。筑波新線が通ったことで秋葉原までは10分余り、他にもJR、東武、千代田線、日比谷線が乗り入れ、都心へのアクセスはすこぶるよい。商店街は賑やかで、加えて芸大、電気大などのある学園都市でもある。一方、裏に回ればまさに北のゴールデン街が続き、吉田類が喜ぶ居酒屋がゴロゴロしている。銭湯のメッカでもあり、脱衣場から大庭園を望める「キングオブ銭湯」もここ北千住にある。また路地に入ればなつかしい昭和である。

## 荒川

北区の岩淵以南の荒川はもともと隅田川から東京湾に注いでいた。かつて隅田川は「隅田川」、「宮戸川」、「大川」など流域ごとの呼び名があり、吾妻橋から下流では「大川」、浅草付近では「浅草川」、千住付近では「千住川」や「荒川」と呼ばれていた。隅田川はしばしば水害を起こし、1904年と1910年の大洪水を契機に、隅田川の東側に新たに放水路を建設する計画が立てられた。工事は19011年に着手し、1930年(昭和5年)に竣工した。このため子供のころはこの川を荒川放水路と呼んでいた。新河川法が制定された昭和40年(1965年)、放水路は正式に「荒川」となり、また隅田川も正式名称となった。千住宿で街道は、水戸街道、下妻街道、日光街道に分岐する。うち、下妻街道は荒川で分断されて途切れており、この終点、荒川近くに骨接ぎで有名な名倉医院がある。

## 名倉(なぐら)医院

名倉と言えば骨接ぎの代名詞として「千住の名倉」は全国に知られている。名倉家は、17世紀末から千住に移り住み、その4代後の名倉弥次兵衛直賢(1750年から1828年)が骨接ぎを始めた。

有名になったのは明治に入ってからで、最盛期の大正時代には1日の患者が300人から500人、夜が明けると旧水戸街道は骨折や脱臼の患者が戸板や籠の行列で埋まったと言われている。家業の伝統は受け継がれ、整形外科医院として今も続いている。建物は、江戸中期から昭和初期までのものが現存し、足立区の有形文化財になっている。

